

JEE 掲載論文の傾向

——北米でのアドベンチャー教育研究では何が起こっていたか——

関 智子

Abstract

To understand the trend of the researches on adventure education and its surrounded areas, a keyword analysis has done with 191 articles on Journal of Experiential Education from 2010 to 2019. Out of 1537 keywords, the most popular keywords are: education, learning, experiential, outdoor, and adventure. With comparing the categories of the words, there are more researches on effectiveness of the education either to specific populations and/or with specific methods than the program types. Some of the keywords are related to therapy or therapeutic programs. Some of the unique words, which is not that popular to use but somewhat might suggest the future trends. Some of the words, such as curriculum or facilitation, were popular at one time, are not popular now.

1. はじめに

本稿では、アドベンチャー教育の始まりと歴史については、詳述しない(『冒険教育の理論と実践』(自然体験活動研究会(編), 2014)など参照)が、冒険学校OBS(Outward Bound School)が始まった英国(日本アウトワードバウンド協会, 2019)など野外活動の長い歴史を持つ欧州と、アドベンチャー教育実践と研究が盛んな北米や環太平洋地域などの様子を伺うことは、共通のコンセプトによって実践と研究を行う世界各地にも目を向けることができ、アドベンチャー教育の全体像を捉えることにつながる。

2. 世界各地のアドベンチャー教育関連の学会と学術雑誌

このレビューの目的は、アドベンチャー教育の実践と研究の全体像を捉える一助になることである。そのため、日本、欧州、環太平洋地域および、米国のアドベンチャー教育とその周辺領域(野外教育、環境教育、野外アドベンチャー活動を使ったセラピーなど)の学会とその学術雑誌をいくつか紹介し、さらに学術専門誌として一番歴史が長い、米国体験教育学会AEEの専門雑誌JEE(Journal of Experiential Education)の最近の動向について示していく。

(1) 各地の学会と専門雑誌

日本でのアドベンチャー教育に関連する学会は、日本野外教育学会である。日本野外教育学会は1997年に創立され、会員数は524(個人及び団体会員)である(国立研究開発法人科学技術振興機構, 2019)。専門雑誌「野外教育研究」は、主に自然体験活動に関する研究が投稿され、2019年末時点では22巻2号まで発行されている。

欧州では、英国のInstitute for Outdoor Learning(IOL)が、学術雑誌のJAEOL(Journal of Adventure Education and Outdoor Learning)を発行している。IOLは、National Association for Outdoor Education(1970年設立)と、Association for Outdoor Learning(1998年設立)が母体となって、2001年に設立された専門家協会である。現在会員数は、団体会員が627、個人会員が1079名となっている(Anderson, N., 2019)。JAEOLは2000年から刊行され、最新号は19巻4号となっている。

環太平洋地域の学術雑誌としては、オーストラリアのOutdoor Education Australia(OEA)が発行するJOEE(Journal of Outdoor and Environmental Education)がある。最新号は2019年11月発行の22巻2号となっている。OEAは、2年に一度野外教育学会を主催し、様々な情報共有と国内と海外の最新の研究や革新的な取り組みの紹介も行っている。会員になるには、オーストラリア国内8地域いずれかの地域協議会に所属することになる(Outdoor Education Australia, 2019)。

米国では、Association for Experiential Education(以下、

AEEと呼ぶ)がある。1972年創立の米国の体験教育学会の一つである。現在会員数1,800名(35か国の個人および団体会員)(AEE, 2019)で、野外教育、アドベンチャー教育の学会としては最も大きい協会と考えられる。学術集会を兼ねた年次国際総会を全米各地で開催している。下位組織として、国際を含む地方部会や専門分野部会があり、地方会合や、関連する学会(例:国際アドベンチャーセラピー学会など)を共催するなどアドベンチャー・体験教育の研究者と実践者が活発に活動している。

3. JEE (Journal of Experiential Education)

Journal of Experiential Education (JEE)は、AEEの学術雑誌で現在年4回発行されている。1978年から今までに42巻発行され、掲載される主な分野は、「野外アドベンチャープログラム、サービスラーニング、環境教育、セラピーへの応用、研究と理論など」(AEE, 2019)となっている。なお、JEE 1巻から42巻2号(2019年6月)までの掲載項目のうち、書評、研究発表抄録、実践報告、提言などを除いた掲載論文数は、842である。

ここでは、JEEに掲載された論文のうち、要約やキーワードなどの掲載項目が統一されている。過去10年間に発行の33巻1号(2010年6月)から42巻2号(2019年6月)までの掲載論文191本をピックアップし、キーワード一覧を作成し、キーワードを概観することで、近年の動向を紹介する。なお、2019年末時点での最新号は42巻3号である。

(1) キーワードの特徴

キーワードは191本の論文の要約と本文の間に示された「キーワード」欄のワードを転記し、PCの検索機能を使って該当期間分の頻度を数えた。総キーワード数は1587単語で、重複を除くと523であった。必要に応じてアドベンチャー教育の実践と研究の文脈を加味し、複数の単語を合わせて(例: service learning)カウントするなどしたものが、表1である。

表1「キーワード表出頻度」では、頻度が5回以上のキーワードを示した。表の通り、最頻出キーワードは、教育(120)、学び(93)、体験的(58)、野外・アウトドア(44)、アドベンチャー(37)、発達(36)と続く。次に、キーワードの機能を次の5つ: プログラムタイプ、手法、効果、対象、哲学・背景、に分類した。機能別では、手法に関してのキーワードが最も多く、続いて効果、対象、プロ

グラムタイプとなっている。

(2) 特殊なキーワードについて

アドベンチャー教育で使われる特殊なキーワードは、次の通りである。奉仕活動を通じた学びを指すサービスラーニング(頻度30)、大自然などと形容される自然環境を表すウィルダネス(26)、個人の行動変容など心理的な治療を意味するセラピー(19)などが頻出している。ウィルダネスセラピー(10)は自然環境でのプログラムを含むことを示唆し、アドベンチャーセラピー(9)は自然環境を使用しない場合もあり得ることを示している(アドベンチャーセラピーの定義より。Gass, M.A., Gillis, H.L., & Russell, K.C., 2012))。人権(Social Justice, 9)は、アドベンチャープログラムを通じて多様性の認知や活用という面と、マイノリティ(少数派)への配慮を示す場合がある。オリエンテーション(ウィルダネスオリエンテーション、オリエンテーションプログラムも同様)は、大学入学前後の新入生オリエンテーションの一環で野外アドベンチャー体験を使うプログラムを指す。キャンプしながらの山岳縦走や、ロープスコース体験をグループで行って関係性を構築し退学率を下げようとする実践はOOPs(Outdoor Orientation Program)と言われるが、上記のオリエンテーション関連の用語と同義語である。遠征(8)は自然環境で移動しながら複数日過ごすことで、山岳縦走や、カヤックなどで河川または海洋を移動するプログラムなども含まれる。

4. 考察とまとめ

文献のキーワードはその文献の大分類(例: 教育)を伝えるだけでなく、難しい内容の手がかりも教えてくれる。今回は頻度の高いキーワードと併せて、欄外となったキーワードも考察することで、この分野のトレンドを考察していく。まず、理論家の名前は最頻出のもので、John Dewey(教育哲学者、シカゴ大学実験学校創設)の3回である。他には数名1回のみキーワード群に出てきている。その場合は、提唱した理論を具体化し効果を測定する(Cooley, S. J., Burns, V. E., Cumming, J., 2016)など、実践と効果測定に関連している。体験教育(24)やアドベンチャー教育(15)などのプログラムタイプは、(基盤となる)理論とも言えるが、JEEでは理論よりも手法と効果に関する用語類の方が多い。アドベンチャー教育は実践であり、様々な対象に体験的な手法を使って実践して、その有効性や効果を検証する形が多いものと

表1：キーワード表出頻度

キーワード	頻度	分類
education 教育	120	プログラムタイプ
learning 学び	93	手法, 効果
experiential 体験的	58	手法
outdoor 野外・アウトドア	44	手法
adventure アドベンチャー	37	手法
development 発達	36	効果
service-learning, service learning サービスラーニング	30	手法
experiential learning 体験的な学び	29	手法
wilderness ウィルダネス（手つかずの自然環境）	26	手法
experiential education 体験教育	24	プログラムタイプ
therapy セラピー	23	プログラムタイプ
youth ユース・若者	19	対象
higher education 高等教育	18	対象
self 自我, 自己	18	効果
adventure education アドベンチャー教育	15	プログラムタイプ
social 社会的な	13	効果
research リサーチ	13	手法
theory 理論	12	手法
group グループ	12	手法, 対象
school 学校	12	プログラムタイプ
environment 環境	11	手法
community コミュニティ・共同体	11	手法
adolescent, adolescents 思春期	10	対象
leadership リーダーシップ	10	効果
wilderness therapy ウィルダネスセラピー	10	プログラムタイプ
outcome アウトカム（結果）	9	効果
teacher education 教員教育	9	対象
social justice 人権	9	プログラムタイプ
skill スキル	8	プログラムタイプ
adventure therapy アドベンチャーセラピー	8	プログラムタイプ
expedition 遠征	8	手法
pedagogy 教育学	8	手法
challenge チャレンジ・挑戦	7	手法
engagement 没頭	6	手法, 効果
orientation program オリエンテーションプログラム	6	プログラムタイプ
group グループ	6	手法
field フィールド（分野または現場）	6	対象, 手法
family 家族	6	対象, 手法
camp キャンプ	6	プログラムタイプ
reflection 振り返り	5	手法
STEM science, technology, engineering, & mathematics	5	効果
curriculum カリキュラム	5	効果
self-esteem 自尊感情	5	効果
behavior 行動	5	効果
wilderness orientation ウィルダネスオリエンテーション	5	手法
recreation レクリエーション	5	プログラムタイプ
methodology 方法論	5	手法
evaluation 評価	5	効果
design デザイン	5	手法, 効果

推測される。

最近のAEE国際年次総会では、OOPsや人権問題についてのセッションや書籍が出てきている。これはJEEにも表れており、大学初年次生への関係性構築や意識づけなどのために、近年OOPsが注目されている（例：2019年度AEE国際年次総会では、OOPsのシンポジウムが同時開催された）し、人権については、同じく2019年のAEEで特別セッションが開催され、JEEでは人権特集号（2019年43巻3号）が組まれた。最近の米国の政治的な変化（バラク・オバマ氏からドナルド・トランプ氏へと大統領が交代）や多様性と差別や分断などの社会的な影響が考えられる。また持続可能な開発が注目されていることもあり、ネイティブアメリカンなどはワードは使われず、土着民（2）というワードに変わっている。STEM（5）というワードは、情報社会でのアドベンチャー教育の展開について研究されたなど新しい用語である。

セラピー関連の研究が多いのは、臨床実践ではエビデンス収集のため様々なデータが取られているためもあるが、発表が可能なものについては、積極的に手法や効果を公表することで、精神医療産業でのアドベンチャーセラピーの存在の認知に寄与したいとの、研究者（例：TAPG：Therapeutic Adventure Professional Group. AEEの専門家グループ）等の努力の結果が現れているとも言える。AEE国際年次総会時にはTAPGを中心に研究者が集まり、研究発表・議論のためのシンポジウムSEER（Symposium for Experiential Education Research）を同時開催している。

キーワードに関する時系列での変化について、数点あげておく。まず、今回対象とした期間にはファシリテーター（支援的な指導者）というワードが入っていないことである。長年AEEでのセッションでも、JEEでもグループメンバーやファシリテーターの資質や振る舞いによる影響について論じられ、繰り返し研究されてきた。次に、サービスマーケティングの頻度とは対照的に、カリキュラムは1回のみでの登場であった。サービスマーケティングは、体験教育を教科教育など教育の主流にするための最適な手段として注目され、90年代終わりから2000年代初にはカリキュラムへの導入について盛んに議論されていた。しかし、カリキュラムが入っていないことの背景について、これからの研究の推移を見守る必要がある。

このレビューの限界としては、対象とした期間の短さと方法の単純さを挙げておく。研究のトレンドを理解するのは研究の上では重要であるので、今後は、対象期間をより以前に延長して比較することが必要となる。セラ

ピープログラム（Cason, D. & Gillis, H.L., 1994）やロープスコース（Gillis, H.L. & Speelman, E., 2008）、サービスマーケティング（Celio, C. I., Durlak, J., & Dymnicki, A., 2011）などのように、適切なテーマのメタ分析など詳しく分析することができれば、キーワード検索のような時系列を使った研究だけでなく、詳しい傾向を理解する一助になる可能性ある。

引用文献

- Anderson, N. (2019), About Institute for Outdoor Learning, Institute for Outdoor Learning, <https://www.outdoor-learning.org/Portals/0/IOL%20Documents/About%20Us/IOL%20-%20About%20the%20Institute%202019.pdf?ver=2019-04-09-163132-623> (2019/12/29).
- Association for Experiential Education (AEE, 2019). About AEE, <https://www.aee.org/who-we-are>, (2019/12/29).
- Association for Experiential Education (AEE, 2019). Journal of Experiential Education, <https://aee.memberclicks.net/jee>, (2019/12/29).
- Cason, D. and Gillis, H.L. (1994). A Meta-Analysis of Outdoor Adventure Programming with Adolescents, Journal of Experiential Education, 17(1), pp. 40-47.
- Celio, C.I. Durlak, J. and Dymnicki, A. (2011) A Meta-Analysis of the Impact of Service-Learning on Students, Journal of Experiential Education, 34(2), pp. 164-181.
- Cooley, S.J. Burns, V.E. Cumming, J. (2016) Using Outdoor Adventure Education to Develop Students' Groupwork Skills: A Quantitative Exploration of Reaction and Learning, Journal of Experiential Education, 39(4), pp. 329-354.
- Gass, M.A., Gillis, H.L., & Russell, K.C. (2012). Adventure Therapy: Theory, research, and practice. New York, NY: Routledge.
- Gillis, H.L. and Speelman, E. (2008). Are Challenge (Ropes) Courses an Effective Tool? A Meta-Analysis, Journal of Experiential Education, 31(2), 111-135.
- 公益財団法人日本アウトワードバウンド協会（2019）, アウトワード・バウンドの起源, <https://obs-japan.org/outwardbound/> (2020.1.1).
- 国際アドベンチャーセラピー学会, <https://internationaladventuretherapy.org> (2019.1.1).
- 国立研究開発法人科学技術振興機構（2019）, 学会名鑑：日本野外教育学会, (<https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/detail/?id=G01584>) (2019/12/29).
- Outdoor Education Australia, JOEE November 2019, <https://outdoorededucationaustralia.org.au/library/nov-2019-joee/>
- Outdoor Education Australia, <https://outdoorededucationaustralia.org.au/about/oea-membership/> (2020.1.4).

自然体験活動研究会(編)星野敏雄・金子和正(監修)(2014),
冒険教育の理論と実践, 野外教育入門シリーズ第5巻, 杏

林書院。

(せき ともこ)